

或女の独白

身体の全てが哀しみを宿し
心には悲しみの廃墟だけが残る
そんな貴方は黙って生きる

どんなに香り高い感情も
どんなに色鮮やかな変転も
モノクロの貴方の生活の前では兎戯に等しい

深い瞳は唯々無言
誰も知らぬ山奥の湖のように
安らかさを宿す瞳ね

他人^{ひと}は貴方の静けさを妬むでしょう
そして貴方の過去をほじくるでしょう
愚かな人々はそれで安心するでしょう、貴方を見下して・・・

希望もなく、絶望もなく
隠された深手の痛みの碑の語るまま
‘生きる’ことを強いられている貴方

そう、貴方には何もない、私と同じ・・・

(1982.9.14)